



TITLE:

[書評] 王瑤編注「陶淵明集」

AUTHOR(S):

一海, 知義

CITATION:

一海, 知義. [書評] 王瑤編注「陶淵明集」. 中國文學報 1957, 6: 121-133

ISSUE DATE:

1957-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/176651>

RIGHT:

書 評

王瑤編注 「陶淵明集」

北京作家出版社 一九五六年八月 前言一六頁 目

録六頁 本文一六四頁

本書の編注者である王瑤氏は、かつて「談古典文學研究工作的現狀」と題する一文（「關於古典文學問題」一九五六年九月上海古典文學出版社所收）の中で次のようにいつている。

「（人民共和國成立以來）この數年にわたつて紹介されて來た古典作家作品は、おおむね次の二段階に分けることが出來よう。第一の段階は、白居易、杜甫、水滸を代表とするもの、第二の段階は、李白、陶淵明、紅樓夢を代表とするものである。……現在では、ちょうどその第二の段階にさしかかつている。……そして第三の段階は、あるいは李煜、蘇軾、三國演義などであるかも知れない。」

この文章が「文藝報」誌上に發表されたのは、今から約

二年前、一九五四年二月のことであり（のちいさか加筆訂正されているが）、今にして思えば、この分析と推定はおおむね正しかつたようである。すなわちここで第二段階とされている紅樓夢をめぐる論争は、この文章の發表される數カ月前、同じ年の九月にはじまり、もちろんこうした論争の性質から考へて、その終結の時期を斷定することはむづかしいし、むしろ今なおつづけられているともいえるわけではあるが、約半年、活潑な意見の交換ののち、若干の未解決の問題（それは古典文學研究一般に共通な問題でもある）を残しつつも、一應ひとつの時期を劃したと考へてよからう（本誌第二冊、村上哲見氏「紅樓夢研究をめぐる批判討論の經過と論點」参照）。陶淵明の評價について、最初張芝（李長之）氏の著書「陶淵明傳論」（一九五三年二月棠樣出版社）への批判という形をとりつつ、光明日報紙上その他で、論争されたのもこの時期とかななる。そして、第三段階とされた、李煜、三國演義についての論争が、一昨年の半ば頃から現在にかけて、まさに展開されつつある（「文藝學習」二八、一九五六年七月、「文學研究集刊」第三冊、一九五六

年九月北京人民文學出版社、吉川幸次郎氏「人民と詩」新潮四月號等参照）。ことに李煜の評價については、ともすれば今まで閑却されがちであつた作品の「藝術性」の問題が、作品評價のもう一つの重要な規準である「人民性」の問題と、いかに辯證法的に統一されうるか、という文學批評の深部にふれる問題を、その主たるテーマとしており、本誌次號において、それは紹介論評される豫定であるが、われわれの興味をつよくひかずにはおかない方向へ、發展しつつある。

さて、この第三の段階のいまだその結論を見ない時期に、陶淵明の作品が全集のかたちをとつて、出版されたことは、まことに時宜をえたものというべきであり、かつ、大きな意義をもつものと、わたくしには思われる。淵明のように、その作品の比較的すくない作家の場合、それが全集のかたちをとつて出版されるのは、ごくあたりまえのこととも、うけとれるが、しかしこの一見ごくあたりまえに思われることの中に、やはり現在一つの意味がふくまれていると、わたくしは考える。編注者は、このことについて、本書の「まえがき」の中で、次のようにいつている。

「魯迅先生は、『もし文を論じようとするなら、その全作品を見るのが何よりで、さらに作者の全人格、および彼の生活した社會の狀態にまで考え及んで、はじめて比較的正確を期することが出来る』（題未定章、七）といつてゐるが、このことは、今なおわれわれ古典文學遺産を學ぶものにとつて、重要な指摘である。讀書と理解の中で主觀的な一面的なあやまりを犯さないために、歴史的狀態にもとづいて、作者を全人的に研究してこそ、比較的正確を期しえよう。殊に陶淵明のように、從來あいまいな理解をされて來た詩人に對しては、こうした研究方法が一そう重要性をもつことはあきらかである。陶詩の數量はもともと多くもないし、本書は、一般讀者に普及紹介するためのものではないがあるが、やはり刪定を加えることをせず、更に詩以外の辭賦雜文をもうしるに附して、讀者の參考に供する。」

魯迅は、ここに引用された同じ文章の中で、「摘句」すなわち詩の中から自分の淵明解釋に都合のよい一句を抜き出すことによつて、淵明を超然たる人物に仕立てあげた從來の評價を、批判しているが、革命後の中國では、その逆

の人物に仕立てあげる傾向が現われつつあつたし、そうした傾向に對する反省も行われていないではないが（葉鵬「論陶淵明」山東大學「文史哲」第五十二期一九五六年二月參照）、現在も充分にそれは克服されていらないのではなからうか。革命後、古典文學再評價の最初の試みの一つとして出版された「祖國十二詩人」（清華大學中國語文系編、一九五三年二月開明書店）の「代序——甚麼是中國詩的傳統」の中で、王瑤氏が、文學作品評價の規準として、現實主義、人民性、藝術性の三つをあげ、作家の消極面と積極面をはつきり區別して、批判的に繼承していかう、とした指摘は、正しいものであつた、とわたくしは考える。しかしそれはあくまでも、一つの問題提起でしかなかつた。しかも、この三つが、常に統一的に運用されてこそ、正しいといえる、それは一つの問題提起であつた。なぜなら、具體的にある作家の作品が分析評價された場合には、ここでも「一面性」とよばれる偏向が、しばしば行われて來たように思われるからである。「人民性」の強調と、「藝術性」の閑却という偏向、わたくしが、逆の人物に仕立てあげる傾向とよんだのがそ

れである。方法は、あいもかわらず、「摘句」であつた。

こうした傾向が一方に存在し、他方、古典文學研究が、いわゆる第三段階に入つて、その方向が、ようやくさきにのべた統一的評價へと深められようとしている時期に、淵明の作品が廉價なかたちで全集として編まれたことは、古典文學研究を更に正しい方向へ一歩すすめるものとして、やはり大きな意味をもつと、わたくしは考えるのである。

さて、本書の最も大きな特徴は、すでに僞託と公認されている「五孝傳」及び「集聖賢羣輔錄」を除き、淵明の作かどうかをあやぶまれている「聯句」を唯一の例外として、その全作品について、制作年代を推定し、編年の體をとつてゐることである。本書は、三章にわかれた「まえがき」のあと、昭明太子の陶淵明傳を載せ、詩を第一部、文を第二部としてまとめ、各詩文ごとに、題解を附し、そのあとに、語句の注解を施してゐる。年代推定は、その題解の部分で行われている。

淵明の作品を、制作年代の順に編むことが、いかに困難であるかは、その全詩一百二十數首のうち、題に年代を示

す甲子を附したものの、わずかに九首、という事實からも容易におしはかることが出来る。序に甲子を示し、詩句に年齢を示す數字を含むものも、たしかに若干はある。しかしことの困難さは、なおわずかにしか減じない。年代推定については先人たちも多くの努力をはらつて來た。しかし、そのおおむねは、百二十首の半ばをわずかに超えるほどのものでしかない。この前人の業績を批判的に吸収しつつ、王瑤氏は、ともかくも、その全作品の制作年代を推定した。その間の事情について、「まえがき」では次のようにのべられている。

「それはとても困難なことであつた。むしろ不可能とさえいえよう。しかし編年ということは、讀者に、作品を読み研究する上での便宜を與えるし、しかも陶詩のなかには、年代を明示したものもあるのだから、出来る限り作品の内容と當時の史實を参照し、作品を時代順に排列してみることも、意義のないことではあるまい。……こうした排列が讀者に（陶詩を読む上で）一つの比較的確確なてがかりを提供することを望んだだけで、けつして『にわかにその

舊觀を復した』といおうとは思っていない。」

たしかに、この仕事は一つの試みてしかなく、同じ場所て王瑤氏自身もいうように、「あやまりや、妥當でない點も多い」かも知れない。しかしわたくし自身、この集を通してみて、今まで氣づかなかつた同じようなことばづかい、あるいは感情、思想が、この排列による、年代の接近した詩の中に幾度かあらわれることに、深い興味を感じた。いま語句についてのみ、その例をあげれば、「負荷」(p. 58, p. 59)「逝將」(p. 59, p. 61)「意・言」(p. 60, p. 63)淹留(p. 67, p. 80)等等がそれである。そのほか、年代推定について、從來の説に従わないもの、あらたに考證を加えたものに、わたくしとしては、教えられる點が、多くあつた。たとえば、「擬古」の詩の「忽ち値う山河の改まるに」という句、及びこれが多く春景に託して詠じられていることから、宋武帝永初二年の作とした年代考證、「形影神」を慧遠の「形盡神不滅論」及びその行動と關係づけての年代推定、「雜詩十二首」を同時の作とせず、その内容から前八首と後四首にわけ、それぞれの年代推定を行つた點、な

どがそれである。わたくしは、主として陶澍及び古直の注とその年譜を参照しつつ、本書を読んだのであるが、三者みなその年代を異なつて推定した数少ない例の一つとして、有名な「飲酒」の詩がある。ここでその評價をするだけの紙幅はないけれども、單に字句のみを根據とせず、時代背景をも考慮に入れての考證であるだけに、三者のうちもつともうなずかせるものであるように思う。

しかしながら、陶詩の編年ということは、やはり「不可能」に近い仕事である。そこには、おのずから無理が生じる。したがつて、充分な説得力をもちえず、疑問ののこる考證も、なくはない。だがわたくしは、王瑤氏のこの勞作に對し、陶淵明研究の土台を提供されたものとして、敬意を払い、これを尊重したいと思う。これを尊重するとは、これをそのまま受け入れることではなくて、この土台そのものを更にかため、その上に立つて淵明研究を發展させることにほかならないと思う。そうした意味で、わたくし自身は淵明の詩に接してから日が浅く、また、意見をのべる限り、自らの説を用意するのが、評者の正しい態度である

とは思ふが、それだけの充分な用意もないままに、いくつかの疑問を提出したいと思う。

一、「雜詩十二首」について、先にふれたように、これを二つの時期にわけたこと自體は、一つの示唆を含んでいるが、後四首のうち最後の一首、すなわち舊來の集に従えば第十二首、をも含めて、淵明三十七歳の作とすることにについては、王瑤氏自身も一應この點にふれてはいるものの、やはり不安である。平易といわれる陶詩の中で、この詩は、「述酒」、「蜡日」と共に、最も難解なものとされている。「述酒」については、湯漢、古直の注を援用しつつ、かれらが未詳とした點にも考證の筆をすすめ、さらに分析を深めているが、「蜡日」にまつたく注が施されていないことと共に、この雜詩第十二首が、他の三首と同じ位置におかれたことは、納得出来ない。從來の編次にこだわらず、その内容からして、むしろこの一首だけをきりはなし「蜡日」と並べた方が、妥當ではなからうか。

二、「五柳先生傳」が、從來暗黙のうちに、淵明晩年のいわゆる悟り切つた姿を示すものとして論ぜられて來たこ

を思えば、これを、若い頃自らの理想の姿を描いたものとする説は、「閑情賦」を同じく若い時代の作とする説と共に、なかなか興味深い。しかし、蕭統の陶淵明傳の「嘗つて五柳先生傳を著わしてもつて自ら沉^たう、時の人これを實録という」という記事が、「親老い、家貧しく、起ちて州の祭酒となる」にすぐつづいていること、そして、史傳の通例として、その敘述は、時間の経過を追つて行われること、この二つのことから、祭酒になる前の年、すなわち二十八歳の作するのは、いささか冒險であろう。同じ傳の中、檀道濟についての記事が、前後矛盾しているという例もあり、五柳先生傳の記事は、むしろそのすぐ前の文章、「穎脫不羣、眞に任ねて自得す」につづけてよむべきであつて、五柳先生傳が、そうした性格規定をもつともよく示すものとして、このことばの下におかれ、更にそれが自傳であるということから、「親老家貧」にはじまる行跡の記述の前におかれたと考えるべきではなからうか。

三、「責子」を四十四歳、「飲酒第十五首」を五十三歳の作としているが、それぞれに見える「白髮兩鬢に被る」

と「鬢邊早や已に白し」の二句の表現が矛盾するのではない。さらにこれを五十四歳の作とする「歲暮和張常侍」にうたわれた「白髮一に已に繁し」と比較する時、矛盾は更に深まる。これらの年代推定は、もう一度考えなおしてみることがあるように思う。

四、「遊斜川」の序に見える「辛酉正月五日」については、從來辛酉、辛酉、乙丑の三説があり、そのうち辛酉に作るのは湯漢本のみで、辛丑に作るのが普通とされているのだが、この題解ではなぜ辛酉をとつたかについて、何の考證もない。

また「讀山海經」については、陶澍、古直、王瑤とも、もとずく詩句は同じであるのに、前二者が安帝の殺された年とするのに對し、なぜこれをあらためて零陵王の殺された翌年としたのか。「詠荊軻」についても、同じ疑問が残る。

さらに「還舊居」の題解は、從來の資料を簡潔に要約しており、非常にわかりやすいが、その年代推定については、古直の説を駁するだけの根據に缺けると思われる。

以上のうち第四については、本書の、一般讀者を對象と

する性質上、どうしても煩瑣にわたらざるをえない考證を求めるのが、そもそもまちがいであるかも知れない。しかしながら、これに類した疑問、あるいは説得力のもう一つ乏しい箇所は、ほかにもいくつかある。それに答えるのは、やはり研究論文の仕事であろう。本書が世に問われて半歳以上を経た現在、わたくしは、王瑤氏にこのことを望みたいし、またそれはいつか近いうちに發表されるものと、期待している。

次に注について若干ふれておきたい。

陶詩は、古典的作品の中でも、舊注の最も多いものの一つであろう。王瑤氏は、それらの舊注の取るべき箇所を充分に吸収しつつ、簡潔適切な注を施している。わたくしの見た限りでは、詩の解釋のキイポイントにあたる箇所で、古直の注を援用している場合が最も多いように思われる。古直の示した陶詩の典據が、適切であることについては、既に朱自清の指摘しているところであるが（「陶詩的深度」語文零拾所收）、本書と對照しつつ讀みかえてみて、その取るべき説の多く、しかもそれがしばしば詩意を深めるの

に役立つことに、あらためて感銘をうけた。しかしわずかな箇所もすくなくはない。王瑤氏はそれらを捨て、さらに、必ずしも典據を知らずとも解し得、しかもそれによつて詩の含意理解を淺くしない場合には、これを記さず、最少限度必要な場合にのみ、その典據を示している。そしてその引用の文は、出来るだけ原文の形をとどめるように留意しつつ、難解な部分は、これを口語體にあらためている。「まえがき」にもべられているように、口語體をもつて古典に注することは、中國ではまだ試みの域を脱していないようであるし、引用の原文にひかれてか、まだ充分に熟したものとはいえない箇所もすくなくないように感ぜられた。逆にそのことが、注を簡潔なものとしてゐる利點はあるのだが、「已矣哉」を「算了罷やんわりか」とおきかえる（p.150）方向は、慎重さを忘れない限り、さらにおしすすめられていいのではないかと思う。

舊注のない語句、あるいはこれをあらためた箇所の注においても、奇異を感じさせるような新解釋の提示はなく、總じておだやかであり、最小限の指摘にとどめて、出来る

だけ鑑賞にまで立ち入らない態度は、本書の出版意圖からいつても正しいものであらう。しかし本書のいわゆる一般讀者が、こうした控え目な注のみによつて、陶詩の單に語句の上での理解ということに限定するとしても、これにいささかの難澁をも感じないものであらうか。本書の二倍の出版部數（二萬）をもつ「唐詩三百首」（一九五六年七月北京文學古籍刊行社）や「詩經選譯」（余冠英、一九五六年九月北京作家出版社）でさえも、天津、大連あたりの地方都市にゆけば、五部から十部ほどしか見られない（「給我們古典文學書籍」『讀書月報』一九五六年二月）という中國の「大きさ」からすれば、一般讀者といつてもおのずから限られるのであろけれども。注が不充分と感ぜられる點については、なおあとて項を設けて具體的にふれてみたい。

題解の所で、たとえば「本詩作於晋安帝隆安五年辛丑（四〇二）、淵明年三十七歲」と、各詩について甲子や元號を一句の省略もなく書かれてある用意と同じく、再出三出の語句についても煩をいとわず、出来るだけ注されている點は、些細なことではあるが、編者の心づかいがうかがわ

れる。

以上、注について、全體として感じた二三の點を指摘したわけであるが、次にそのいくつかの箇所について、意見や希望をのべてみたいと思う。

一、「連雨獨飲」の「眞に任ねて先んずる所なし」という句について、注者は、蕭統陶淵明傳に「淵明少^{わか}くして高趣あり、……眞に任ねて自得す」の句があることを指摘して讀者の理解を助けているが、こうした方法は、陶詩自體の中でも適用出来るのではないか。それはいきおい頻出する語句の指摘ということになり、むしろ論文の取扱う領域に入るのかも知れないし、また、精讀しさえすれば、おのずから氣づくことでもあるわけだが、注家の必ずしも等閑に附すべきことではないと思う。王瑤氏も、この陶詩をもつて陶詩を釋すという方法を、まづたく用いていないではない。すなわち「雜詩第七首」及び「飲酒第八首」では、この方法が適用されている。しかし陶詩の場合、さらにこれはおしひろめらるべきではないか。固窮、眞、善、自然、拙、あるいは淹留、依依などの語がそれである。この方法は、

おそらく彼此あいまつて、理解と印象を深めるにちがいない。一つの具體例を挙げれば、「飲酒第十七首」の「幽蘭前庭に生ず、薰りを含みて清風を待つ、清風脱然として至らば、蘭艾の中より別たれん」に見える「脱然」ということは、ここだけでは、あいまいな印象しか與えないかも知れないが、これを「歸去來兮辭序」の「親故の余に長吏とならんことを勸むるもの多く、脱然として懷いありしも、これを求むるに途なし」と對照して考えれば、最初の印象のもつたしかは、比較的拭われるのではなからうか。

二、次に注の施されていない語句のうち、これを補つてほしいと思うものを二三挙げたい。

まず助字のもつニュアンスについて（句のつながり方をも含めて）殆ど説明がない點である。「連兩獨飲」の「故老 余に酒を贈り、乃ち言う飲まば仙を得ん」の下句に對して、「故老のことはをのべたもの、信ぜられぬことを示す語調」と注しているが、この程度の注のほしい所が他にもいくらかある。句のつながり方ということになれば、いきおい鑑賞にまで立ち入らざるをえなくなるから、これを

さけたのかとも思われるが、たとえば、「誠願游崑華、邈然茲道絕」(p. 48)と「區區諸老翁、爲事誠殷勤」(p. 70)とに見える「誠」は、そのもつ意味が、その底邊ではつながりつつも、ニュアンスを異にするものではなからうか。もし注するとすれば、後者は「誠然」であるとしても、前者は「即使」とすべきであらう。もし前者をも「誠然」と解せば、陶詩にしばしば見える神仙否定の思想と、この詩句はいささかの矛盾を來たすのではないか。また「忽興一觴酒、日夕歡相持」(p. 61)は、*to happen to* あり、「輒依周禮往復之義、且爲別後相思之資」(p. 108)は、「とりあえず」というほどの意味であり、それぞれ普通の用法とニュアンスをちがえて使われているのでなからうか。こうした助字についての疑問はほかにもいくつもあり、またしばしば見える「語助詞、無義」という注についても、不満を感じるが、こうした疑問や不満は、あるいは、わたくしが外國人であり、しかも充分に中國のことになじんでいないことから來る無理解さにもとづくものであるかも知れない。

それと似た無理解によるのかも知れないが、「與殷晋安

別」に見える「山川千里外、言笑難爲因」の下句などは、いわゆる一般讀者にすらりとわかることばづかいなのであらうか。これがもしかりに、「われらのかたらいも、もはや今まで通りというわけにいくまい」というほどの意味だとすれば、せめて「因」の字ぐらいに何らかの注釋がほしいところである。ほかにもこうした箇所がいくつかあるが、今はそれをおいて次に進みたい。

三、次は、不充分と思われる注に對する意見と希望である。まず、祭酒、主簿、督郵、從事などについて、すべて「官名」の二字で片づけているが、せめて淵明と關係の深いものだけについても、具體的な説明がほしかつたように思う。また典據について、莊子、列子には篇名を附しながら、論語、史記などはこれをあきらかにしていないのは、それが餘りにポピュラーな書物であるからか。ついでに例えば、「飲酒第二十首」の微響ということばについて、その典據を發見したのは古直であり、それは重要な指摘の一つでもあつたのだが、古直はそれとなく句「孔子（仲尼のあやまりか）没して微言絶め」を、漢書藝文志に見ゆと

し、王瑤氏はこれを史記とあらためており、その箇所を示していないため、史記の專家のたすけを借りて探してみたが、一向みあたらない。これは、あるいは何かの思いちがいではなからうか。

「擊壤」(p. 159)に注して「古代の一種の遊戲、ここては隱居を指す」といい、「頭上巾」(p. 70)に「儒者の巾」とのみ注したのでは、充分な理解の助けとはなるまい。やはり前者では、「擊壤歌」にふれ、後者では、蕭統の傳に言及すべきであらう。

「環堵」(p. 124)を「住室」とするのも充分ではない。これはいうまでもなく禮記の儒行篇に見えることばで、淵明に近い時代の詩人から例をあげれば、晋の張協の「雜詩第十首」に「環堵おのずから頽毀し、垣閭形を隱さず」というごとく、せまいという意味がふくまれねばならぬ。

「止酒」の詩の各句に止字をふくむ特異な形式について、それが、民間歌謡の影響によるものとするのは、重要な指摘であると考えるが、それだけにとどまつては、納得するわけにはいかない。ちなみに古直は「惟止能止衆止」とい

う莊子の句をあげているが、問題はこの二つをつなぐものにあるだろう。

四、これは些細なことであるが、いささか用意がたりなかつたと思われる點を二つあげたい。一つは、同じ「和澤」ということばに、「澤、雨露」(p.20)、「和澤、和風澤雨」(p.23)と二つの解のあること、他は、本書がその體裁からして順を追つてよまらるべきものと考えゐるのに、「伊」という助字につき、後出のものにはじめて注していること(p.11, p.23)。

五、次に、わたくしとしては採りがたい説を、一つだけ挙げたい。「示周續之祖企謝景夷三郎」の詩に「相去不尋常」とあるのを、「不近」と注しているが、わたくしは、これを反語と考え、「豈不近」すなわち「沒有幾里路」と注すべきであると思う。そうでなければ、「相去不尋常、道路遼何因」は、同義語のくりかえしになるし、この詩に諷意ありとするかぎり、詩の後半が生きて來ないからである。六、王瑤氏のおこなつた校勘のあとについては、くわしくしらべるいとまがなかつたので、ふれるべきではないか

と思うが、一二氣のついた點だけのべておきたい。「與殷晋安別」の冒頭の句「游好非少長」について、「一本作久長」とするのが、本書の注に見える數少い指摘の一つであるが、これはわざわざ示す必要のあるものとも思えない。しかるに「飲酒第十九首」の普通のテキストが「拂衣歸田里」とする詩句を、焦竑本によつて「終死歸田里」とあらためたのには、これに注していない。焦竑本は宋本の系統であり、たしかによるべき一つのテキストであるかも知れない。しかしこれに據つた理由につき、ここではやはり注がほしい。どちらに作るにしろ、詩全體の意味は、さしてかわらないにしても、陶詩評價にいささかの差をつけることばづかいではなからうか。

「歸去來兮辭」の「或命巾車」は、普通のテキストに従つたものであろうが、吉川教授が近著「陶淵明傳」(一九五六年六月新潮社)で、經韻樓集をひいて「或巾柴車」に作り、同じ段玉裁の説文解字第七篇下巾字の注でも指摘されているごとく、また江淹の「雜體詩」及びその李善注から見て、やはり後者に従つた方が、おだやかであり、この情

景にもふさわしいのではなからうか。

七、排印本の場合、最も氣づかわれる誤植は、本書の場合非常にすくなく、ここにも編者の細心さを見ることが出来る。氣づいた箇所をあげれば、本文については、衣↓意(p. 65)、花↓華(p. 91)。題解と注についても二三誤りはあつたが、重要なものと思えないのではぶくことにする。

以上、毛をふいて疵をもとめたような所も多く、しかもそれが、實は疵ではなかつたとされる點もすくなくないかと思うが、検討していただければ幸いである。

最後に王瑤氏の陶淵明研究についてふれたいと思つてしたが、ここでは一點の指摘だけにとどめたい。

魯迅は題未定草のなかで、「陶潛正因爲並非渾身是靜穆、所以他偉大」(陶潛は、その足のうらまでが平靜なのでは決してなかつた、だからこそ、偉大なのである)といつてゐるが、近來の陶淵明研究が、このことばをもふくめて、魏晉風度及文學與藥及酒之關係や門外文談などでのべられた魯迅の示唆に導かれてゐることは、すべての人の認めるところであらう。ところで魯迅は、「並非渾身是靜穆」と一

部否定でいつてゐるのであつて、全面的な否定の形で「渾身並不靜穆」といつてゐるのではない。しかるにこの年來の淵明研究は、淵明が「靜穆」でないことを、あまりにも強調しすぎて來たやうである。「祖國十二詩人」以來、本書の「まえがき」に至る王瑤氏の研究もまたその例外ではなかつたように思う。すなわち、魯迅の細心なことばづかいにも見られるように、淵明には、否定出來ない要素として「靜」の面があるわけであり、その淵明を「靜」のみでもつて律するのは、あきらかにまちがいてあるとしても、「動」を抑えてのその「靜」が、詩的情感とどうつらなるか、という點のつつこみが、不充分であつたように思うのである。

しかし淵明論を展開しているこの「まえがき」の前二章は、本書のために筆をおろされたものではなく、二年前に發表された「關於陶淵明」(一九五四年九月二八日光明日報文學遺產)と題する論文の轉載である。その間、本書を編む仕事、地道につづけられて來たのであらう。さきにものべたように、こうした整理工作の上になつて、王瑤氏が、更に充實した論文を發表されることを期待したい。

本書が、陶詩普及の役割をはたすものとしてあるばかりでなく、われわれの據るべき新しいテキストでもあると考へ、あえて一文を草した次第である。

(京都大學 一海知義)

馮夢龍編著 顧學頤校注 「醒世恒言」

北京 作家出版社 一九五六年七月初版 上下二冊

本文八六四頁

あらかじめことわつておくが、本稿は書評というにあたらない。ただ、異國のわたくしが、たまたま恵まれた位置にあるがゆえに可能な、本國の人たちの誤解に對する修正と、心からささげる勸告であるにすぎぬ。

標記の書は、いうまでもなく、宋元明三代にわたる「話本」(講釋本、またはその體に擬した短篇小説)の寶庫の一つであり、後に『喻世明言』と改稱される『古今小説』(一九五五年九月、文學古籍刊行社刊)、および『警世通言』(一九

五六年一月、作家出版社刊)とあわせて、『三言』と呼ばれるものである。本書も、その原本は、他の二言と同じく四〇篇の短篇小説を収めるが、このたびの作家社本では、第二三卷「金海陵縱欲亡身」のみが、卑猥のゆえをもつて全文削除せられている。もつとも、同じ理由による原文の削除は、他の諸篇中においても部分的に行われているが、ここではそれを當面の問題にしない。また、この作家社本には、さきに出た『警世通言』と同様、難解の語句や典故などに關する注が、各篇末に加えられている。それらはいずれ後にあらためて觸れるが、校注者の顧學頤氏については、本書にやや先んじて上梓された、校注『元人雜劇選』(一九五六年五月、作家出版社刊)の著があることのほか、ほとんどのにも知らない。

さて、古典の覆刊に際しては、底本とすべきテキストが十分に吟味されねばならぬこと、またいうまでもない。『醒世恒言』のばあい、わたくしの知るかぎりでは、そのテキストにおよそ三種ある。その一は、わが内閣文庫と吉川幸次郎博士のもとにそれぞれ一部が藏せられる、明の葉